

フィールドワーク と デザイン思考

IHIは長きにわたり、多くの製品を世の中に送り出してきました。旧社名である、「石川島播磨重工業」の銘板が付いた機械装置が、おそらくは、もう50歳を超えるであろう装置でも、現役で活躍している姿を目にすることも少なくありません。IHIがこれまでに提供してきた製品群は、発祥の祖である船舶建造に始まり、エネルギー供給機器であるボイラや、人の暮らしを支える橋梁や水門、人の移動を担うジェットエンジンや過給機など、**広義の社会のインフラ**として、人々の快適で安全・安心な生活に資することを企業価値としてまいりました。

時代は進み、満足のための消費から自己表現のための消費への変化や、社会インフラに対する投資の減少など、何もかも新しいものにリプレースしていくことができない社会構造への変化に伴い、IHIも「**お客さまと一体となって、お客さまの現場で価値ある製品・サービスを進化させることができる企業**」への進化を目指しています。

しかしながら、その**変化・進化を果たそう**とするときに、われわれはハタと立ち止まってしまったのです。われわれは、何を真の価値としてお客さまに製品を提供してきたのだろう、誰を真のお客さまとして製品を送り出してきたのだろうか、そして、**お客さまが本当に望むもの**を作ってきたのだろうか、と。

技術広報誌である「IHI 技報」の80周年企画を考えるに当たり、過去を振り返るだけでなく、**目指す未来へ向かう姿**を示す企画にしたいと強く考えました。

IHIの製品は、お客さまのもと、お客さまのオペレーションのなかで、しっかり働いています。しかし、あらためてお客さまの姿を見つめ直そうとしたときに、「**IHIの製品はお客さまからどのように見えるのだろうか**」、そして、「**IHI製品の働きぶりをもっともっと知るべきだ**」という、二つの思いを強くもつに至りました。

「IHI製品の働きぶりを知ろう」としたとき、「**きちんと見ること、理解すること**」を学ぶ必要があると考えました。現在は、センサー類を配置するモニタリングの技術とAIとビッグデータで

予測をする技術があふれています。しかし、**われわれが、「お客さまの行動を理解**し、そのなかの潜在的なペインに共感し、それらにソリューションを提供できるようになること」を目指すのであれば、**学ぶべきは**、まず、フィールドに出てお客さまと共に行動し、**行動の真意を理解する「手法」**であると考えたのです。

IHIと**京都大学**は、長きにわたり連携をしてきましたが、あらためて、地域の文化や人類の進化など、社会と科学の融合のなかにある真理の究明に、京都大学が当たり前用いてきた「**フィールドワーク**」を学びたいと考えました。「フィールドワーク」は単なる観察ではなく、**真理を究明するためのサイエンス**であると考えています。

また、IHIは2018年度、**東北芸術工科大学**と共に「**I-To Lab.**」を設立し、IHIに欠けていると感じている「**お客さま目線**」の醸成を支援していただく体制を構築しました。そのなかで、われわれが「**お客さまのご要望をかなえている**」と考えている製品群を、「**お客さまの要望を形にするデザイン**」を考える東北芸術工科大学の目線ではどう捉え、どのように「デザイン」するのかを知りたいと強く思いました。そして、その「デザイン」を見たときに、われわれがどのように感じるのかも知りたい、と。そこで、本号の構成・編さんをお願いし、真のお客さまの望む価値を知るきっかけとすることにしました。

イノベーションの実現には、**Art, Design, Science, Technology**の融合が不可欠であるといわれています。IHIはTechnologyに軸足を置いた企業です。**京都大学と東北芸術工科大学との連携**のなかで、DesignとScienceに係る力を醸成し、さらにArtも加えて、新たな「**未来**」に向けて歩き始めたいと思っています。